

漱石新聞小説復刻全集

〔監修〕 山下 浩

全十一卷



漱石文学の原点——新聞本文の決定版

ゆまに書房

監修のことば——なぜ今『漱石新聞小説復刻全集』なのか

山下 浩

●全巻内容●

第一巻 虞美人草

第二巻 坑夫

第三巻 それから

第四巻 三四郎

第五巻 門

第六巻 彼岸過迄

第七巻 行人

第八巻 先生の遺書 (「こゝろ」の原題)

第九巻 道草

第十巻 明暗

第十一巻 小品・解題 (山下浩)

入社の辞 / 京に着ける夕 / 文鳥 / 夢十

夜 / 元日 (明治四十二年) / 永日小品 / 紀

元節 / クレイグ先生 / 元日 (明治四十三

年) / 思ひ出す事など / 病院の春 / 子規

の画 / ケーベル先生 / 変な音 / 手紙 / 三

山居士 / 初秋の一日 / ケーベル先生の告

別 / 戦争から来た行き違ひ / 硝子戸の中

漱石愛読者間にこのような全集本文が普及するのは由々しきことであり、それゆえ当復刻全集は、この本文に代わるべく、当時の「東京版朝日新聞の読者に提供された本文」という單純明快なコンセプトの本文を提供することにした。はじめて活字化され、当時の読者にはじめて読まれた本文として、その歴史的意義ははかりしれないからである。これ以外に初版本類の本文も存在するが、その大部分は新聞からのリプリントである。出版形態にできるだけそつて復刻された当全集が、書架に飾り置かれる資料集としてではなく、日常的に読み引用にも供されるリーディング・テキストとして、多くの方々に活用されることを望みたいと思う。

なお、東京版と大阪版は同じ日に掲載されることが多かつたが、本文その他同一というわけではない。両者の異同がどのような印刷過程によって生じたかについては、今後の詳細な研究を待たねばならないが、多くの場合まず東京版が自筆原稿から組まれ、その後刷りの類をもとに大阪版が組まれたように思われる。逆のケースもある。本復刻全集の本文は東京版に統一されるが、参考までに大阪版の主な異同や挿絵類を示し、大阪版にしか掲載されなかつたいくつかの小品については、大阪版に拠つてこれを掲載し、その点を明記するようにした。

(書誌学者)



●朝日新聞社入社直後の漱石 (明治四〇年五月)

※表紙図版:岡本一平画「朝日新聞社初期時代の漱石」

今後の漱石研究に とつて不可避の全集

—より確かな本文に根ざす試み—

平岡敏夫

漱石は言うまでもなく新聞小説家であり、その主要な小説はほとんど新聞に発表された。今日、数々の漱石全集が刊行されているが、その本文に関しては、さまざまな問題が出ている。このたび、ゆまに書房が刊行する漱石新聞小説復刻全集は、新聞初出という原点に立ち返り、漱石の小説・小品のよ
りたしかな本文をめざそうとするものと言えよう。

監修の山下浩氏は、その著書『本文の生態学 漱石・鷗外・芥川』で、研究者、文学愛好者に衝撃を与えた人である。とくに漱石全集の本文に関して本格的に追究した山下氏の仕事は、漱石全集刊行者・編集者、あるいは漱石研究者を震撼さ

せたと言つてよく、その山下氏が監修を引き受けているとい
う一事をもつてしても、私はこの漱石新聞小説復刻全集に大きな期待を抱いている。かならずや今後の漱石研究にとって、この復刻全集の刊行を心からよろこんでいる。

(筑波大学名誉教授)

新たな作品世界に 出会う喜び

中島国彦

文学研究を志した頃、漱石作品の新聞切り抜き帖に古書店で何度か出会った。すでにかなり高価だったが、漱石作品をたんねんに切り抜き自分で冊子にしていた読者は、自分の考
る以上にたくさんいたかも知れないという思いは、妙に新鮮であつた。勉強を深めるにつれ、当時の読者の期待のあり方、そしてそれを巧みに念頭に入れて執筆した漱石の創作の機微とでも言うべきものの実体も、少しずつ考えられるようにな
つた。一回、そして次の二回——それは文字通り、臨場感に満ちたなまの体験である。マイクロフィルムのくすんだ画面を通して、当時の紙面全体の中で作品を読むのも一つの楽し

みだが、一度当時の読者の立場になつて一回分一回分をゆつくり読み味わつてみたい——改めて新聞原紙から見事に再現された美しい質の高い印刷面は、そうした積年の思いをかなえてくれる。一回分の余韻に浸りながらページを繰る期待感は、時には書かれた内容以上のものをもたらしてくれる。
『本文』についての見識を背後に潜ませた山下浩氏の気配りが快い本シリーズは、何重にも小説を読む楽しみや怖さ、文
学の持つ冒險性を明らかにしてくれるだろう。

(早稲田大学文学部教授)

漱石に限りなく

近づく

半藤一利

これは新聞に発表された小説ではないけれど、感激で椅子から落っこちたことがある。『坊っちゃん』十章で、山嵐につけられて坊っちゃんが戦勝祝賀会へ出かけたところ、舞台へ、「いかめしい後鉢巻をして、立つ付け袴を穿いた男が十人許り……」抜き身を携げて立つ場面が書かれている。この「後鉢巻」が、初出の雑誌『ホトトギス』では「向ふ鉢巻」とな
っていると聞かされた時である。江戸っ子は元来が鉢巻とくれば向鉢巻か捩じり鉢巻で、後鉢巻は悲惨な太平洋戦争の時にはやつたもの。江戸っ子漱石先生の鉢巻のイメージのなかに、まず後鉢巻のあるのが長いこと不思議でならなかつたか

らである。単行本化されたとき、編集者が田舎者で勝手に大間違いの直しをやらかしたのであるうと、当時やたらに毒づいた覚えがある。

森鷗外は後々までしきりに文章を推敲するが、漱石は全く手を入れない作家である。本になつてからは読み直すことをあまりしない。それだけに新聞や雑誌発表のときにつづかり目を通した。『虞美人草』なんか、毎日自分で切り抜いた、と日記に書いている。つまり初出の新聞にふれることは、漱石に限りなく近く接すると同義になる。ゆまに書房の快挙を心から喜びたい。

(昭和史研究家)

漱石新聞小説復刻全集

A4判上製／カバー装／平均250ページ

●全11巻揃定価：本体98,400円十税

ISBN4-89714-740-9 C3393

■全巻構成

第1巻 虞美人草 ISBN4-89714-741-7

●定価：本体7,800円十税

第2巻 坑夫 ISBN4-89714-742-5

●定価：本体7,800円十税

第3巻 三四郎 ISBN4-89714-743-3

●定価：本体7,800円十税

第4巻 それから ISBN4-89714-744-1

●定価：本体7,800円十税

第5巻 門 ISBN4-89714-745-X

●定価：本体7,800円十税

第6巻 彼岸過迄 ISBN4-89714-746-8

●定価：本体7,800円十税

第7巻 行人 ISBN4-89714-747-6

●定価：本体12,000円十税

第8巻 先生の遺書 (「こゝろ」の原題)

●定価：本体7,800円十税 ISBN4-89714-748-4

第9巻 道草 ISBN4-89714-749-2

●定価：本体7,800円十税

第10巻 明暗 ISBN4-89714-750-6

●定価：本体12,000円十税

第11巻 小品・解題 ISBN4-89714-751-4

●定価：本体12,000円十税

原紙の姿を可能な限り再現。極めて鮮明な版面で大阪版との異同を記し、周到な解題を付すなど資料も充実。

朝日新聞に掲載された漱石の文学作品を網羅した漱石新聞小説の決定版。

◎漱石が読者に提示した最高の本文

ゆまに書房

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493

| | | | |
|---|--|----------------------------|-----|
| ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日 | | ※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。 | |
| 漱石新聞小説復刻全集 全11巻 ●定価：本体98,400円十税 ISBN4-89714-740-9 C3393 | | 取扱店 | |
| お名前 | | | セット |
| ご住所 | | | |
| TEL () | | | |